

たえてはらばむ術もかな。』  
心こころのやみに照らざらば、

西山陰に沈む日の  
消えよ光の甲斐なさに。』

鏡の里に晴むそめて、  
暗黒に入りゆく夕日影。  
月江上の秋の黄昏、

我世すずしと照らしつゝ、  
彼方に遠へ浪の音、

無聲にまざる思ひして、  
唯淨界のにはひあり。

忽ち起る風いたみ、  
雲は愁ひて光消え、

白波いたく吼えくるひ、  
見ぬ翼に黒暗飛びて、

眼は長し雲の上。』

神の慈愛のまなざまか  
遙か澄みそむ大空に

硯友會詩歌

河土紅葉(兼題)

紅葉の下行く水もあやほまき心してさせ繪津の河舟

あやにしきさらす河土のもみち葉はちりても浪にじきたへて花  
 山井のあさき流に秋の色深くもにはふさしの紅葉  
 はてはまたいつこの瀬にかにはふらむ散りて流るゝ峯の紅葉  
 夕日影にはへる水にもみち葉の波のあやれる玖磨の川面  
 影うつる鏡か淵の薄紅葉水にも秋の色は見えけり  
 行舟の影もかくるゝ川霧の絶間に匂ふ檻の一もど  
 白川の岸のみち葉秋おいぬ水紅に今はそめけり  
 白川の波のうねうね色どるは風のたくめる紅葉なるらん

雁聲稀(全)

を山田のおくてのいねもあるものを今はまれなりこしの雁金  
 此ころは雁の羽風の音たへて葦の枯葉を名残とそさく  
 世をうしと雲にや雁も入にけむ沼田をわたる聲たにもなま  
 れどつるゝ雁さへまれになりにけり何處か秋の初めなるらむ

村家菊(即題)

菊の花入重九重にさく頃はひなも都もへたてさりけり  
 賤かやにわくれてにはふ菊の香のふかきや花の心なるらむ  
 訪ふ人のありやなまやとまら菊の淋まぐ立る賤の庵哉  
 なかくに露に色香の深きかなまつか垣根の白菊の花

鐵州

江陽

桃江

基紀

蘆月

寄熊

桃江

寄熊

蘆月

鐵州

稼堂先生

芝峯

桃江

